

## 福山市の一水路に見る

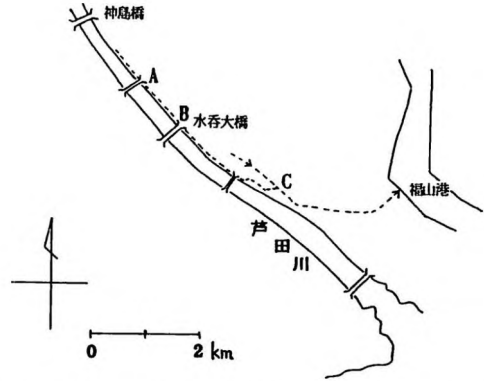
## クロモとミズオオバコの群落

橋本卓三

福山市の芦田川沿い、草戸町から新涯町にかけて古い排水溝があり、筆者が近くに住んで3年以上になるが、毎年盆頃から秋おそくまでたくさんのミズオオバコの花が見られる。この溝は秋から春にかけては水の流がほとんど無くて汚水が浅く溜っているのであるが、田植え頃から秋にかけてウキクサ類の浮かんだ水田排水が多量に入り、かなりきれいな緩い流れが生じてクロモやミズオオバコが一勢に繁茂して来るのである。

1987年8月15日に全流域を見て回った。排水溝は図のA地点から上では草が密生して、やがて溝も消失するのであるが、Aから下流のC地点にかけて幅2m足らず、水深0.3m程(増水時0.5m以上)の緩やかな流れが見られた。両岸には流れに接して湿生雑草が生育し、砂泥の堆積場所では溝をほとんどふさぐまでに繁茂している場所も見られた。AからB地点にかけてはクロモが密生し、一面に繁って底の見えない所もあり、花は少ないものの多数のミズオオバコが見られた。BからC地点に向かってしだいに流れが衰え、水もやや汚れてクロモの密生度は低下して来るが、ミズオオバコはさほど減らずに個体はむしろ大きくなって花がかなり見られた。C地点で別の下水溝が合流して水は大変に汚くなり、水流もほとんど無くなる。合流点付近ではミズオオバコとクロモの個体が散見されたが直ぐに消失した。9月15日に再び観察したが、溝の掃除が行なわれており、B地点のやや下流の一部でクロモと混生するミズオオバコに多数の開花が見られた以外は見るべきものは無かった。

福山には昔から芦田川より引水するいくつかの用水路系があり、この中には17世紀初頭に上水道として造られたものも含まれている。ここで述べた水路はかつてそうした灌漑施設の一部であったのだが、1960年代の用排水路分離工事でC地点付近までの旧水路がコンクリート隔壁により二分され、用水路のみがここから北上する様に変更されたために排水溝として残ったものである。そして、この排水溝は地元の人の話では70年代の終りまではA地点付近にあったいくつかのメッキ工場を中心とする排水の流入により魚や水草の生育し得ない着色した水域だったそうで、その後芦田川河口沖の埋め立て地に当該工場が移転したりして徐々に現在の様な姿に戻って来た



ものの様である。なお、市内の用水路では一部底泥のある場所にクロモやエビモ等の群落が見られるものの、多くはコンクリート底であって所々、砂礫の溜り場にエビモが散見される位である。

この地域は1985年頃から順次、流域下水道の新設供用に伴う水洗便所化が推進されており、この溝も旧来の雑排水溝としての役割を失いつつある。今後とも周辺地域で水田が減少し宅地化が一層進行して行けば、雨水排水路として浚渫や掃除が定期的に行なわれる様になると予想され、「ゴミ」としての水草群落が今まで通りの存続を見る事は難しいのではないかと思われる。

○滝田謙譲著『東北海道の植物』(カトウ書館、昭和62年5月、1116頁、10,000円)

北海道東部にみられるシダ植物以上の植物1100種あまりのスケッチに簡略な説明をつけた植物誌である。著者は中学校の数学教師。土曜と日曜に採集した材料を、早朝から出勤前と仕事から帰ってから夜寝るまでの時間、毎日スケッチを続けて完成した努力の結晶である。1種を描くのになくとも2時間、手間のかかるものだと5~6時間かけたということからも、いかに精魂こめた力作か伺い知れる。このような書を自費出版同然の形で世に問われた著者に敬意を表したい。

水草もしっかりと調べられていて、道東の水草を知る上でおおいに参考になる。一部の図鑑で北海道西南部にしか産しないとされるフサモが釧路地方に産することもこれでよくわかる。イトイバラモの図も、全体図がぎこちないのが残念だが、一般書に描かれるのは初めてではなかろうか。

なお説明文には、種小名の意味がふれてあるが、誤りがいくつかある。例えばエゾミクリ("emersum は風土

化したで……”)、スカシタゴボウ (“islandica はアイランドの意味で……”) など。

最後に本書に収録されていないが北海道東部に産する水草を、私の気付いた範囲で挙げておく。カラフトグワイ、イヌイトモ、フトヒルムシロ (知床)、チトセバイカモ (根室)、オオバイカモ (新種)。

○『福島県植物誌』(福島県植物誌編さん委員会、昭和62年12月、481頁、頒価7000円)

福島県は岩手県につぐ日本第2位の広い面積を有する県であり、植生の上でもフローラの面でも太平洋側、日本海側双方の要素を含む広がりをもっている。それだけに福島県の植物相が詳しく説明されることは日本の植物地理全体を見渡す上でもきわめて意義深いことと言えるであろう。それだけに、この植物誌の完成は待ち望まれるものであった。

カラー16頁、白黒48頁の写真につづき、植物研究史、気候、地形と地質、植生、植物区系、植物目録—と福島県のフローラの成り立ちを理解するために必要な解説と研究成果が、本書の主体をなす。植物区系のところでは同県固有種の水草であるジャッコイの発見の経緯が詳しく紹介されている。植物目録は、“一部信頼のおける文献”よりの引用もあるが、他は全て標本にもとづいたもの。既報告の種でも標本の所在のはっきりしないものは「目録から除外した植物」としてまとめられている。このような慎重な取り扱いがあってこそ、この植物誌が今後の研究のための礎となり得るのである。

水草に関しても沿海の水域から高山の池沼まで含むだけあって種数が豊富だ。ヒメバイカモの記録なども興味深い。

○『香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(新川水系ため池)』(香川県環境保健部環境自然保護課、昭和62年11月、94頁)

香川県における自然環境の基礎的調査研究をとおしてその現状を明らかにし、その資料をもとに将来にわたる自然環境保全のあり方を探ることを目的として、表記の調査が進められてきた。全国でも屈指のため池県である同県において、ため池の自然環境を抜きにしては香川県の自然環境は語れないということで新川水系(高松市の東にあたる)のため池がとりあげられた。貯水量5万 $\text{m}^3$ 以上のため池53ヶ所で水生植物、両生・虫類、淡水魚、

底生動物、トンボを対象にそれぞれ地元の適任者が調査にあたっておられる。

水生植物では、各池に生育していた水生植物の群落組成表と、それらの分布概況図が載っている。今回の調査対象となったのは水生植物の生育に必ずしも適当でない広大な池だったので面白くなかったとの感想が述べられているが(実際、水草らしい水草のない池がいくつもあ)、これはこれとして将来の変化などを追跡するための貴重な資料である。水草の豊富な“小さな池”の資料が今後集積されることで、水草のよく育たない環境も含めて、ため池の自然環境というものがより深く理解できるのである。

OE. O. Gangstad "Freshwater Vegetation Management" (Thomas Publ., 1986, 380p.)

この本は水生雑草の防除の実際をもっぱら取り扱っている。それは著者が研究者というよりも、水生雑草問題の現場に接してきた技術者(役人?)であることにもよるのである。水生雑草問題の概説や主な雑草の紹介もあるが、ページの大半は具体的な防除法、特に除草剤を使った方法の解説にあてられる。どの除草剤を、いつ、どれ位の濃度で散布すればどのような効果が期待でき、環境や人間の健康にいかなる影響を与えるかにまで言及される。まさに現場への指針を提供しているわけである。これが日本の現場にそのまま通用しないことはもちろんであるが、このような本が出ることは、水生雑草管理の仕事に多くの人がかかっているアメリカならではの感ずる。

(角野康郎)

○投稿のお願い

次号(6月)の原稿をお送り下さい。

原稿送り先 〒657 神戸市灘区鶴甲1-2-1

神戸大学教養部 角野康郎

締切 5月25日

10周年記念号の原稿締切は9月20日ごろの予定です。この方の準備もお願い致します。詳細は次号でお知らせします。

水草研究会会報 No.31 (1988年3月)

発行 水草研究会(神戸市灘区鶴甲1-2-1)

神戸大学教養部生物学教室内)